体育における対話的活動の課題と改善に向けて
－哲学対話の視点から－

学籍番号　199334
氏　　名　中島　理志
大学院主指導教員　林　洋輔

０．研究の背景

アクティブラーニングという言葉が、時代の変遷とともに、意味の輪郭を形成しつつ、いよいよ新学習指導要領において評価の観点として、教育現場へと介入していく。しかし、依然として、いわゆるアクティブラーニングの授業は、そもそもアクティブな児童・生徒によるアクティブラーニングであるのではないだろうか。つまり、アクティブラーニングな授業を展開するためには、まず彼らをアクティブ可能な状態にしなければならないにも関わらず、その段階を無視し、アクティブ状態であることを前提にアクティブな活動を展開しているつもりになっているのではないだろうか。とりわけ、こうした困難さを体育活動中に抱えているとの指摘も保健体育科は受けている。

１．体育分野における対話的活動の課題

本章では、アクティブラーニングが日本教育界へと導入された歴史的・社会的背景について明らかにした。当初アクティブラーニングが導入されたのは大学の大衆化と密接な関係を持っていた。つまり、大衆化が引き起こしたニーズの増大に講義型授業は対応できなくなったのである。そして、あらゆる能動的な学習を、アクティブラーニングと称していた。その後、時代の変遷と共にアクティブラーニングによって得られる学習成果を社会が強く求めたこと、すなわち変化の激しい社会に追い付くことが求められたことによって、アクティブラーニングの考え方は中等教育段階以下にまで降りていき、現在の形となった。

しかし、アクティブラーニングには決定的ともいえる基本的な課題が残っている。それは、アクティブな活動を展開すれば生徒らはアクティブに学びだすという幻想である。活動的な学び、例えば班活動を思い起してみよう。その活動はいつも同じ生徒が取り仕切り、半ば一人ですべての作業をこなしているように見えることがある。そこに対話的な活動はなく、あるのは自己完結的な活動である。

こうした課題は、体育分野でとりわけ対話的な活動の課題として、文部科学省より指摘されている。体育活動中は確かに教室とは異なったコミュニケーションの風景が観察されるが、果たしてそうした課題が発生する要因とは何だろうか。それは体育嫌いに関する研究から理解できる。つまり、体育嫌いからみた他者は、体育の出来不出来に関わる他者として認識しているということである。このことが意味するのは、後に詳述することになるが、対話的な関係とは異なった他者との関係を体育授業では内在してしまっている、ということになる。

２．哲学対話の対話的活動への意義

哲学対話とは決して難解な専門用語を乱発して論理を複雑に組み合わせるようなものではない。そうではなく、互いの体験の吟味を問いかけ合ったり、確かめ合ったりする中で、二人ないしはそれに参加する人々たちの間に共通了解を見出そうとするものである。

しかし、ルールのない所で哲学対話を始めることはできない。この活動の原型ともいえるプラトンの記した対話篇に出てくるソクラテスと対話者との間で取り交わされた約束を思い返すと良い。哲学対話は権威的な言葉を許さないし、意見の変更も了承されているし、現代では発言までも強制されない。なぜなら、真理の探究のためには、どのような他者にも開かれていなければならないからだ。そして、誰しもの意見も尊重され対話に貢献するためには、参加者の誰もが真理を求めず、目の前にある体験世界の吟味にのみ重きを置く姿勢が求められる。

ところで、対話的な授業はその無限性から計画に彩られた有限的な授業とは元来相性が悪いものだ。それを乗り越えるためには、対話的な活動の成果ではなくプロセスに意味を置かねばならない。それを叶えられるのは、哲学対話である。哲学対話はほとんど場合、明確な答えが出ない。それでもこの活動が教育的に有意義となるのは、対話へと準備する教育に哲学対話をするプロセスが位置づくからである。

しかし、そうしたプロセスをルールに従ってすれば常に達成できるものでもない。実践ではルールに従えずに、とりわけ問い合うことが難しい場合がある。こうした態度をボルノーは防禦的態度として、対話へと向かう為に乗り越えねばならない態度とした。

３．対話へと向かうために

ホイジンガが遊びを想像する時、中心にある活動はギリシアのソフィストたちの姿であった。彼が措定した遊びの性質に哲学対話がはまり、またこの活動の原型にはソクラテスとソフィストたちとの問答があったように、哲学対話もまた遊びなのだ。

私たちは、しかし退屈するから遊んでいる。その退屈は過去処理しきらなかった生活経験上のあらゆる刺激が安寧の日々を過ごすうち、私たちの中からくるしめるのであった。こうした苦しみすなわち退屈から逃れるために、遊ぶしかなかったのである。

だから遊びには熱中しなければならない。なぜなら、中途半端に遊んでいると、いつまたあの退屈がやってきて私たちを苦しめるかわかないからである。なんらかの遊びに没頭し、それ以外のことには見向きもしないような、寝食も忘れる様な活動、それこそが遊びなのである。

また、遊びの世界には外の世界の慣習とは異なるルールが存在する。つまり、慣習も外に追いやるものがまた遊びである。

以上を踏まえると、防禦的態度が遊びの外にある慣習に依存していることを考えれば、体育の授業で対話的な活動をする場合には、まずもってその活動が遊びを基調とし、またその遊びに生徒らが熱中していなければならないことが考えられる。

しかしそれだけでもまだ十分でない場合がある。そこでハワイ式ｐ４ｃを中心に活用され始めたコミュニティボールに解決の糸口を探った。そこで導出された結果は、ボルノーがいうところの私的空間へと連れだしてくれるものは他者からの視線の有無であり、視線を発言者以外へと向けさせることにコミュニティボールの効果があることがわかった。